

1970年代におけるA. ザイボルトの体操の変革について

— 1960–1970年代の彼女の著作等を手掛かりにして —

菅井 京子 (21世紀スポーツ文化研究所)

Über die Gymnastikreform A. Seybolds in den 1970er Jahren — Anhand ihrer Schriften in den 1960-1970er Jahren —

SUGAI Kyoko
(Institut für Sportkultur im 21. Jahrhundert)

Zusammenfassung

Die Gymnastikbewegung, die in den 1920er Jahren anfang, schien in den 60er Jahren ihre Aufgabe zu erfüllen und ausgereift zu sein. Aber in den 70er Jahren teilte sich die Gymnastik in unterschiedliche Gruppen auf. In diesem chaotischen Zustand der Gymnastik sollen mehrere Reformen, die erstmaligen seit der Gymnastikbewegung, geschehen sein. Eine dieser Reformen erwähnten H. Bernett und B. Freckmann unabhängig von einander. Dort gibt es Zitate aus A. Seybolds „Schulgymnastik I“, aber keine konkreten Erklärungen der Schulgymnastik.

Ziel der vorliegenden Arbeit ist es zu klären, was die Schulgymnastik A. Seybolds war und um was für eine Reform es sich handelte. Es wird eine Hilfe sein, um das Gesamtbild der Gymnastikreformen in den 1970er Jahren zu finden. Dabei sollen die Schriften A. Seybolds in den 1960-1970er Jahren usw. berücksichtigt werden.

A. Seybold befreite die Gymnastik von weltanschaulicher Befrachtung und verstiegenen Formulierungen, um zu fragen, was sie tatsächlich für die Erziehung leisten kann. Auf der Basis der Sportpädagogik fasste sie die Schulgymnastik als Bewegungserziehung zusammen. Sie zielte durch die Schulgymnastik auf Bewegungsformung und Bewegungsgestaltung von Laufen, Hüpfen und Springen, die typische Bewegungen von Kindern waren. Sie begriff, dass das der Bewegung der Gymnastik innewohnende Gesetz, „das Herausformen von Auftakt, Akzent und Ausklang“ ist. Und sie dachte, dass „Bewegungsformung als rhythmische Bewegungsbildung“ und „Bewegungsgestaltung als kreatives Lernen“ durch dieses Gesetz der Dreiphasigkeit des Bewegungsablaufs erfolgen. Dafür unterrichtete sie in den Aufgaben von Grundform, Variation, Kombination, Improvisation und Komposition. Bei dem Unterricht wurde der folgende Ablauf des Lernens berücksichtigt. Der Ablauf sollte vom explorativen Sammeln der Bewegungserfahrungen, über die Grobform (Lernen der einfachen Bewegungstechniken) zur Feinform (Beherrschen der gymnastischen Bewegungstechniken) verlaufen. Außerdem überprüfte sie die Gütekriterien für die gymnastische Bewegung. Sie erklärte die Gütekriterien ohne die abstrakten Wörter wie „schön“, „organisch“ oder „lebendig“ usw., die seit der Gymnastikbewegung übernommen wurden, mit konkreten Wörtern über die anschaulichen Bewegungen.

Damit könnte man sagen, dass die Schulgymnastik A. Seybolds, die eine klare Theorie und Methodik hat, zu einer hervorragenden Reform in den 70er Jahren führte.

はじめに

1920年代に始まった体操改革運動 (Gymnastikbewegung)¹⁾ は、60年代にその課題を達成し、リズムカルな「動きの修練」や「動きづくり」を引き継ぐ豊かな「動きの教育」²⁾ に資する体操としてそれを円熟させていった^{3),4),5)}。しかし、70年代になると、体操はその様相を大きく変化させ、分化し多様化していくことになった⁶⁾。この一見混乱とも取れるような体操の状況のなかで、体操改革運動以後初めての変革が体操に起こったという⁷⁾。H.ベルネット (Hajo Bernett) やB.フレックマン (Barbara Freckmann) も、この時期の体操の変革について言及している。そこには、A.ザイボルト (Annemarie Seybold) の『学校体操 I (Schulgymnastik I)』⁸⁾ からの引用があり、「…結局のところ、(ザイボルトは) 体操理論を『世界観的な重荷と極端な形式化から解放した』といえよう…」⁹⁾ や「今日、もはや体操の価値を否認する者はいない。過去を引きずらず、人は、新たに体操の教育的価値を問おうとしている。『体操を冷静にみて、世界観的な考察と極端な形式化から解放すること』が結局のところなされたということを、ザイボルトは (『学校体操 I』のなかで) 補説として述べている。」¹⁰⁾ という記述がある。しかし、これらいずれにおいても、このザイボルトの変革の具体的な事例は全く示されていない。1970年代の体操の変革については、「1970年代のメダウの学校における方向転換について」¹¹⁾ や「1970年代以降のボーデの学校について」¹²⁾ 等の先行研究がある。いずれも、体操学校の第二世代の指導者たちが創始者たちの学校を引き継ぐに当たり、メダウの学校ではスポーツ医学に立脚し、ボーデの学校では創始者の運動学に科学的な見地から修正を加えて変革を行ったものであることが明らかにされている。これらについて、ザイボルトも『学校体操 I』の序文で、ほんの一行ではあるが自身の変革と並行するものとして触れている¹³⁾。

本研究では、ザイボルトの『学校体操 I』に焦点を当て、彼女がまとめた「学校体操」、すなわち彼女自身が行った体操の変革がどのようなものであったのかを明らかにする。これは、1970年代になって体操改革運動以後初めてなされたという体操の変革の全体像をつかむための一助にもなるであろう。用いる主な資料は、『学校体操 I』の他、『学校体操 II』¹⁴⁾、「体育においてゲシュタルトする方法について」¹⁵⁾、「体操の動きの基準 (1976年)」¹⁶⁾、『体育の教授法の原理』¹⁷⁾、『体育における教育学的原理』¹⁸⁾ 等である。

I. ザイボルトによる体操の見直し

1. A. ザイボルト (Annemarie Seybold, 1920-2010) について

ザイボルトの経歴について、『体育の教授法の原理』¹⁹⁾ やドイツスポーツ科学協会 (Deutsche Vereinigung für Sportwissenschaft) のホームページに掲載された追悼文²⁰⁾ を参考にしてまとめると、おおよそ次の通りになる。

彼女は、ミュンヘンとエアランゲンで、ギムナジウムの教師になるために、ドイツ語、歴史、体育、教育学、心理学を学んだ。1942年に体育・スポーツ教師試験に合格、1943年に体操教師試験に合格、1944年に第1次国家教員試験に合格、1945年にH.ヴェンケ教授のもとで博士号を取得し、1947年に第2次国家教員試験に合格した。1945-1950年エアランゲンの体育研究所に助手として勤めた。1951-53年に彼女はカール・ディームの助手として、ケルンでスポーツの科学的研究法を学んだ。しかし、その後は、事実・データ指向の実証主義的なスポーツ科学研究には批判的な立場を一貫してとり続けた。1957年、エアランゲン-ニュルンベルク大学の教育学部に講師として勤めた。そこで彼女は、基礎学校・基幹学校の教員養成に携わり、スポーツ教育学やスポーツ教授学の領域で活躍した。また、「体育 (Die Leibeserziehung)」等の専門誌に長年協力し、特に月刊報告で知名度を上げた。スウェーデン、デンマーク、ベルギー、オランダ、オーストリア、

スペイン、アルゼンチン、ブラジル、ペルー等々で、講演や教育活動を多数行った。1954年にカール・ディーム賞、1980年にハンス・グロル・メダル、2002年に連邦功労十字勲章が授与された。

本研究の主な資料としているザイボルトの著作『学校体操 I』は、1976年に出版されたものである。彼女はニュルンベルクの小学校（基礎学校・基幹学校）で1968-69年に1年生であったあるクラスを対象にして継続的に、その時々々の学生たちとともにスポーツ授業の実践を行った。彼女はその継続的な実践の8年目に、この実践研究を基にして『学校体操 I』を著したのである。

2. 体育（スポーツ）術語検討の国際会議における体操定義の見直し

1970年代の体操を取り巻く状況の変化については、既に「1970年代のメダウの学校における方向転換について」や「1970年代以降のボーデの学校について」で述べた^{21), 22)}が、それはおおよそ次の3点にまとめられる。

- (1) オリンピック大会の隆盛に伴い人々の関心が体操よりもスポーツに集まったこと
- (2) 学制の変更等により教職資格が体操教師でなくスポーツ教師になったこと
- (3) スポーツ科学、特にスポーツ生理学やスポーツ医学の発達が目覚ましいものであったこと

このような状況のなかで、とりわけ70年代の体操に直接的に変化を促したのは、体育（スポーツ）術語検討の国際会議での体操の定義の変更であったと考えられる。1963年10月14-19日に、オーストリアのシュトローブルで体育（スポーツ）術語検討の国際会議²³⁾があった。この会議は、体育・スポーツを学問的に整備するだけでなく、急速に進む社会の科学・技術化や国際化に対応するためにも、体育・スポーツで用いる概念の統一が必要であるということから開催された²⁴⁾。この会議で、体操は次のように定

義し直された。それまで体操の定義とされてきた「身体づくりと動きづくり（Körper- und Bewegungsbildung）」については、確かにドイツ語圏では通用する正確なものであるが、国際交流の盛んな時代に術語として一義的に限定しうるようには翻訳されえないもので、誤解されやすいものである²⁵⁾とされ、体操は次のように定義された。体操は、「身体や動き自体を問題にする身体運動」であり、「生理学的な意図において準備、補強すること、あるいは芸術的、音楽的、美的な観点から行われることである。」²⁶⁾ この定義の「あるいは」の前半部分の「生理学的な意図において…」は「身体づくり」を、後半部分の「芸術的、音楽的、美的な観点から…」はリズム体操等による「動きづくり」を置き換えたものと考えられる。この定義では、「身体づくり」と「動きづくり」が「あるいは（oder）」でつなぎ合わされているので、当然体操は分化の道を進むことになり、体操は一気に多様化していくことになった²⁷⁾。

ザイボルトは、『学校体操 I』で、1970年代に一般に行われている体操を次の3つのグループに分類している²⁸⁾。

- (1) 効果体操（Wirkungsgymnastik）；姿勢、補償、コンディショニング、呼吸等をねらいとする。姿勢体操、補償体操、コンディショニング体操、呼吸体操、器官体操等。
- (2) 音楽体操（Musische Gymnastik）；動きの形成と動きのゲシュタルトウングをねらいとする。リズム体操、ダンス体操、ジャズ体操等。
- (3) 競技体操（Leistungsgymnastik）；体操自体における、あるいは他のスポーツ種目における競技をねらいとする。新体操競技（Wettkampfgymnastik）、トレーニング体操、コンディショニング体操等。

ザイボルトは、(2)の音楽体操について、次のようにも述べている。「音楽体操は動きの形成を目的としており、ダンスや音楽との密な関係にお

いて発展してきた。いわゆるダンス体操はダンスのコンポジションのための出発点として体操の基本の動きを利用しており、ダンスとの関係を強調する。リズム体操は音楽との関係を強調する。R.ボーデによると、それは、リズムに対して敏感にすることと、動きをリズムカルにすることを課題としている。²⁹⁾ このことから、彼女は、音楽体操を上位概念として、そのなかにダンス体操やリズム体操等を含むものと捉えていることがわかる。ベルネットも、音楽体操を合理的な効果体操に対置し、「哲学的人間学」³⁰⁾的な体操と説明している。音楽体操の目標は、動きに生命を吹き込むことであり、動きの感覚を活性化し動きを形成するもので、音楽的な動きの教育であるとしている³¹⁾。

3. 体操改革運動の見直し

ザイボルトは、『学校体操 I』の序文で、20世紀後半に体操に変革が起こったことと学校体操との関係について述べている³²⁾。その要旨はおおよそ次の通りである。

体操は文化批判の所産であり、その主張は19-20世紀の種々の社会運動（婦人運動、青年運動、体操改革運動等々）の思潮のなかで展開された。体操改革運動は、なかでも女性解放運動と密接に関わり、その批判は例えばコルセットの使用による身体束縛、隠蔽、退化等に向けられ、自由な身体文化が追求された。また、この批判は強まる主知主義化の傾向にも向けられ、体操改革運動の支持者は、F.W.ニーチェ（Friedrich Wilhelm Nietzsche）の「身体の理性論」（die Lehre Nietzsches von der Vernunft des Leibes）³³⁾やL.クラゲス（Ludwig Klages）の「魂の対抗者としての精神論」（die Lehre Klages vom Geist als Widersacher der Seele）³⁴⁾を取り上げ、はずむ動きを通して、人間の身体を知性の支配による痙攣や硬直から解放し、神秘的な原初のリズムに導き入れることによって、本来の自然に戻すことを主張した。さらに、人間を否応なく機械的な拍子へと強いる技術をも批

判した。それは、産業社会時代の影響を強く受けた競技スポーツにも向けられ、能率（成績）万能主義（Leistungsdruck）に由来するスポーツの動きの唯一の評価基準として、達成された量や数だけを用いることにも反対した。成果を求める緊張した動きではなく、無理のない、くつろいだ、揺れるような動きがその目標になった。このような主張を背負って、体操では、「自然へ帰る、ギリシアの美へ、裸へ、生き生きとした（有機的な）リズムへ戻ること」が求められた。1930年代頃まで、これらの主張が足枷となり体操を苦しめてきたとしてザイボルトは次のようにまとめている。「このような文化厭世主義（Kulturpessimismus）や自然神秘主義（Naturmystizismus）的傾向が、体操を学校に導入することと子どもに適した練習財を構築することを妨げてきたのであるが、20世紀の中頃になり、やっと体操は世界観的な重荷と極端な形式化から解放され、教育の場で何ができるのかが冷静に考察されるようになった。」³⁵⁾

このようにザイボルトは、体操の背景にある神秘的なもの、非合理的なものを捨てることによって、学校への体操の導入が可能になったというのであるが、それでは彼女が目指した体操とはどのようなものであったのであろうか。彼女は『学校体操 I』のなかで目指すべき体操として次の3つのもを挙げている³⁶⁾。

- ・神秘的、秘教的で特殊な体操ではなく、どの子どもにも合う体操
- ・女子のためだけでなく、男女共学のクラスで、男子のためにもなる体操
- ・理性と敵対するのではなく、子ども同士の精神的な共同作業を通して他の学校行事同様、子どもに考えることを促すような体操

以上のように、ザイボルトは学校に導入する体操として3つのもを挙げているが、その具体的な内容がどのようなものであったのかを次章でみていくことにする。

II. ザイボルトの「学校体操論」における 目標・内容・方法

1. 体操における目標

ザイボルトは、「体育においてゲシュタルトする方法について」という論文のなかで、「動きの形成 (Bewegungsformung)」と「動きのゲシュタルト (Bewegungsgestaltung)」について、O.F.ボルノー (Otto Friedrich Bollnow) が指摘していることとして次のように述べている。「形態 (Form) は任意に外から刻印され、ゲシュタルトは内から慎重に展開される。なぜなら、ゲシュタルトは動きに内在する原則を実現させるものであるからである。」³⁷⁾ 彼女は、体操の動きに内在する原則を「上拍、強調、終わり (Auftakt, Akzent und Ausklang) をつくり出すこと」³⁸⁾と捉えている。そして、「動きのゲシュタルト」を動きに内在する原則に従って、既にある動きをより完全なものへと意識的に形成することとしている³⁹⁾が、それだけでは不十分で、ゲシュタルトには「自由な活動の余地が必要で、その結果何か創造的なものが付け加わらなければならない」⁴⁰⁾としている。

ここでザイボルトは、ボルノーの論を受けて、「動きの形成」については動きが外からの働きかけによって形成されるとし、「動きのゲシュタルト」については内から形成されるとしている。しかし、「動きの形成」について、外から刻印されることがあることを認めながらも、いや本来そうであることを認めているからこそ、彼女は、体操においてはやはり「動きの形成」も動きに内在する原則に従ってなされることを理想としている。そのことは『学校体操 I』のなかの次のような文章から読み取ることができる。「体操の学習過程において、美しい動きのひな型としての動きの技術⁴¹⁾にいきなり取りかかり丸覚えするようなことはいけない。子どもたち自身が動いて、そのとき起こったことに反応し、適応しながら、その動きを完成させていくのが良い。パートナー、ボール、縄に反応して、グループ等に適応

して、動きは生き生きと自然で本物になる。ステレオタイプは避けるべきである。」⁴²⁾ 結局のところ、動きを課題にする体操においては、「動きの形成」も「動きのゲシュタルト」も「動きに内在する原則に従って」、すなわち「上拍、強調、終わりをつくり出すこと」によってなされるというのである。

ザイボルトがいうこの「上拍、強調、終わり」は、体操におけるリズムカルな動きの基本とされるもので、R.ボーデ (Rudolf Bode) がその著『リズム体操』で次のように述べているものと同様のものである。「あらゆる動きは、3分節された経過をとる。すなわち、用意の動き (Ausholbewegung) = 上拍 (Auftakt)、主の動き (Entladung) = アクセント (Betonung)、納めの動き (Auslaufbewegung) = 下拍 (Abtakt)」⁴³⁾の3局面である。また、H.メダウ (Hinrich Medau) の体操でも、「上拍、強調、終わり」がリズムカルな動きの基本とされている⁴⁴⁾。このように、体操におけるリズムカルな動きの基本である「上拍、強調、終わり」は、『ドイツ体操』の「動きの修練 (Bewegungsschulung)」や「動きづくり (Bewegungsbildung)」からR.ボーデやH.メダウの体操の「動きの教育」⁴⁵⁾へと引き継がれ、目指されてきたものであり、ザイボルトも、このようなリズムカルな動きの形成において、豊かなゲシュタルトが可能になるというのである。

2. 教授・練習財 (Lehr- und Übungsgut) としての基本の動き

ザイボルトは、基礎学校の1-4年生 (6-9歳) と基幹学校の5-9年生 (10-14歳) の子どもを対象にして、『学校体操 I』では、走る、跳ねる⁴⁶⁾、跳ぶ (Laufen, Hüpfen, Springen) の「動きの形成」に重点⁴⁷⁾をおき、『学校体操 II』では、ボール、縄、輪を用いての体操を展開した。

彼女は、体操の基本の動き (Grundformen der Gymnastik) について、体操改革運動の成果

である「動きの教育」で基本とされた「歩く、はずむ、走る、跳ぶ、振る」を、常に一律に用いることには批判的であり、学校体操では「走る、跳ねる、跳ぶ」⁴⁸⁾の3つを選択した。その「走る、跳ねる、跳ぶ」は、子どもの日常の動きで繰り返し行われることから、彼女は基本の動きとして学校体操に導入したという。特に「跳ねる」を子どもの最も典型的な動きの形態であるとして重要視した。また、ボール、輪、縄は、元来探索的な動き（試行錯誤しながら繰り返す動き）の衝動を誘う遊び道具でもあり、ザイボルトは次のように述べている。「J. H. ペスタロッチ（Johann Heinrich Pestalozzi）の時代から（あるいはそれ以前から）、子どもたちは、指導されなくても後ろへ走ったり、向きを変えて走ったり、旋回したり、ボールを投げたり受けたり、跳ねるボールとともに跳び上がった等々、いろいろな動きを試してみるものであった。単純な動きを経験してその動きの型を増やすことと、それを変化・発展させること（ヴァリエーション・コンビネーション）は、今日なお、子どもの生活の一部であり、もし授業で彼らの動きの経験を拡充し、深化させることができれば、欲求も満すことができる。」⁴⁹⁾

このように、ザイボルトは基本の動きとしての「走る、跳ねる、跳ぶ」を中心的な教授・練習財として重視し、さらにそれを展開、応用しやすいボール、輪、縄といった道具を用いることも取り上げている。

3. 体操の方法：5つの課題と学習過程

ザイボルトは、学校体操の教授・練習財を明確にするために、走る、跳ねる、跳ぶ等の多様な動きの可能性を整理して、次のような5つの課題をその順次性も含めて提示している⁵⁰⁾。

- (1) 「基本の動き」の正しい形態を習得する。その際、体操に特有な動きの技術が課題となる。例えば、陸上競技での走ることと、体操でのそれとは区別される。足を強化し硬い床の上で体重を受け止めるために、足

の独特な使い方が必要になる。普通に走るのとは違って、つま先から着地しかかとへ体重を移していく⁵¹⁾。カーブや円を描いて走ったり、走りながらターンするときには、腕の動きも変わってくる。体側で振るのではなく、バランスを取るために上腕を軽く浮かせる等々である。

- (2) 次に、子どもにできるだけ豊かな動きの可能性を開くために、基本の動きの「ヴァリエーション」を課題にする。動きを変化させることは、もともと子どもの生活の一部であり、授業ではこれらの動きの経験を蓄え深めるとともに、子どもの欲求を満たす⁵²⁾。例えば、空間的变化（前へ、後ろへ、横へ）、リズムの変化（4拍子で、3拍子で）、パートナーやグループで等々。
- (3) 基本の動きの自然なつなぎ合わせが次の課題になる。「コンビネーション」である。走ると跳ぶ、走ると投げると受けるをつなぐ等々。
- (4) その次の課題は「即興」である。これは、ヴァリエーションとコンビネーションを土台にして、それらを越えて子どもに想像力を発揮させる。基本の動きの課題で、音楽に合わせて、イメージを課題にして（例えば、言葉のイメージで、急ぐ、大急ぎで、疾走する）等々。
- (5) 最後は、動きの「コンポジション」が課題になる。ここでは、動きをつなぎ合わせて分節のあるひとつの全体が生まれること（動きのゲシュタルトウング）を学ぶ。例えば、ひとつの基本の動きから、あるいは音楽に合わせて、3つ以上の分節⁵³⁾のある一連の動きをつくる等々。

ザイボルトは、「走る、跳ねる、跳ぶ」の教授・練習財を、このような5つの課題、すなわち、基本の動きの習得、ヴァリエーション、コンビネーション、即興、そしてコンポジションを通して展開した。因みに、このような総合的なゲ

シュタルトゥングとしてのコンポジションへ至る課題設定は、ザイボルトのオリジナルではなく、『ドイツ体操』の「5つの研究領域（動きの基本修練、姿勢修練、動きの発展、動きと手具、動きのゲシュタルトゥング）」⁵⁴⁾の流れを汲むもので、70年代当時既にある程度一般に普及していたものであり、ザイボルトも自身の著作^{55), 56)}のなかで、J. ホラー=フォン・デア・トレンク (Jutta Holler - von der Trenck) やU. ミュンスターマン (Uta Münstermann) のそれを引用している。

この5つの課題のそれぞれにおける学習過程について、彼女は、体操における学びの出発点は「探索的な動き」⁵⁷⁾、つまり、「教えられるのではなく、子どもたち自身がいろいろ試してみて、そこで生まれてくる動き」であると述べ、その過程を次の3段階で示している。

- (1) 動きの経験の探索的収集（試行錯誤しながら自由に動き、動きの経験を蓄える）
- (2) 大まかな動きの形態の習得
- (3) 洗練された良い動きの形態（体操の動きの技術）の習熟

これらの段階は順次進められるものであった。しかし、ザイボルトは、これらの学習過程の段階のなかでも特に最初の「動きの経験の探索的収集」、すなわち、「子どもたち自身が自由に動いて試してみて得られる動きの経験を積むこと」を重要視していた。それは「動きの形成」と「動きのゲシュタルトゥング」を一体のものとして授業を進めるうえで不可欠の方法論だという。これは、それまでの他の体操文献には見られないものであり、彼女オリジナルのものであるといえる。

4. 良い動きの基準 (Gütekriterien)

上述したように、ザイボルトは学習過程の最終段階で「良い動きの形態」を目指すのであるが、この「良い」についても、彼女はこれまでいわれてきた多くの動きの基準を再検討している。

彼女は『学校体操 I』の序文で良い動きの基準について、「生き生きとした（有機的な）、身体に合った、美しい、調和のとれた等々、これまでも体操の動きに関して沢山の基準があった。これらによって、正しく、あるいは誤って動いているのが、子どもたち自身にもわかるのが良いのであるが、実際それは難しい。」⁵⁸⁾と述べている。そこで、彼女は、体操の動きの経験が少ない子どもたちにも理解ができ、自身の動きの良し悪しを検討することができる、またパートナーとの共同作業で検討し合うことができるように、次のような良い動きの客観的な基準をまとめた⁵⁹⁾。

- ・全身的な動き (Totalbewegung)
- ・緊張と弛緩がリズムカルに交替する動き、呼吸のリズムに合う動き、
- ・はずみや振りによって導かれるリズムカルで流れるような動き
- ・主の動きと反対方向に起こる準備の動きがあり、次の動きの先取りができるような動き、（特別な開始姿勢やポーズは不要）
- ・大きな動き
- ・「走る」では、速く、軽やかに、空間に広がる動き
- ・「跳ねる」では、軽やかに、力強く、高く上がる動き
- ・「跳ぶ」では、助走や踏切と結びついた、高く上がる動きと柔軟な着地

彼女は、これらの基準がすべての基本の動きに当てはまるだけでなく、ボールを用いた動きや縄跳び等にも当てはまるという。『学校体操 I』と同じ1976年に発表された論文⁶⁰⁾では、『学校体操 II』の手具体操に対応する「ボールを転がす」、「ボールを突く」、「ボールを投げる、受ける」、「短縄を跳びながら走る」、「縄跳び」、「縄を振る」、「輪を転がす」、「輪を投げる、受ける」、「輪を振る」等々へのこれらの基準の適用例も追加して具体的に説明している。

このように、ザイボルトは、例えば「美し

い]、「有機的な」、「生き生きした」等々といった体操改革運動当時から引き継がれ、良い動きの基準とされてきた抽象的なものを用いず、動きについてのできるだけ具体的な言葉で良い動きの基準を明らかに示した。ここで、ザイボルトが挙げている良い動きの基準の内容を検討してみると、前半の4つの項目、「全身的な動き」から「準備動作と主動作の関係」までは、それまで「体操の動きの法則」⁶¹⁾や「体操の運動学」⁶²⁾として提示されてきたものをわかりやすい言葉で表わしたものであるが、後半の4つの項目、「大きい、速い、力強い、高い等の動き」は、良い動きの基準としては明示されてこなかったものであることがわかる。彼女は、活動範囲の拡大について、「小さな動きは、不安定、自信のなさの印とみなされる。大きな動きは、安定、自信の印とみなされる。動きの大きさは、良い動きの実施の特徴で、学習の成果である。」⁶³⁾と述べている。「大きい、速い、力強い、高い等」を良い動きの基準とすることによって、子どもたち自身が理解して行う自主的、積極的な学びを促すために、彼女は敢えてこれらを明示したものと考えられる。一方で、これらの基準が子どもたちの動きを技術に直結させてステレオタイプに追い込んでしまうようなリスクを回避するように、彼女は、子ども自身が行う「探索」や「即興」というような学習過程を通して細心の注意を払った⁶⁴⁾。

Ⅲ. ザイボルトの「体操論」の理論的根拠

1. スポーツ教育学 (Sportpädagogik)

これまでみてきたように、ザイボルトは、体操改革運動に由来する諸々の主義主張から離れて、冷静に体操の動き自体を問題にすることによって、体操改革運動の成果としての動きの教育を引き継ぐ体操をまとめた。それでは、体操改革運動の主義主張から離れて彼女が拠り所とした理論的根拠は何であったのであろうか。

それに関して、C. ケーゲルマン (Claudia Kugelmann) は、ザイボルトを追悼する文章のなかで、ザイボルトの専門分野としてスポーツ教

育学を挙げている⁶⁵⁾。スポーツ教育学は、スポーツが一般的な運動概念として用いられるようになった1970年代には誕生したばかりの新しい学問分野であった⁶⁶⁾。『スポーツ科学事典』では、スポーツ教育学は次のように紹介されている。「教育領域としてのスポーツの教育学的基礎や教育上の問題に関する研究と指導を目的とする学問。スポーツ教育学はスポーツ科学の部分領域である。

[注] 体育理論は、スポーツ教育学の前段階形態あるいは基礎と考えられる。… (以下省略)⁶⁷⁾ ザイボルトは、既に1959年に『体育における教育学的原理』の初版を出版している。彼女は、これを教育・研究の足場として学校体操をまとめていったと考えられる。

ザイボルトは、1973年の『体育における教育学的原理』の第7版で、次のような10の原則を掲げて体育を構想している⁶⁸⁾。

- (1) 自然に即していること
- (2) 子どもに適していること
- (3) 個々人に合っていること
- (4) 社会と結びついていること
- (5) 全体 (Ganzheit) 的であること
- (6) 具体的であること
- (7) 生活に即していること
- (8) 価値を目指していること
- (9) 自発的であること
- (10) 教授・練習財の構造に即していること

2. スポーツ教授法 (Sportdidaktik)

教授法について、ザイボルトは1972年の『体育の教授法の原理』のなかで、J.C.F. ゲーツムーツ (Johann Christoph Friedrich Guts Muths)、F.L. ヤーン (Friedrich Ludwig Jahn)、A. シュピース (Adolf Spieß)、K. ガウルホーファー (Karl Gaulhofer) とM. シュトライヒャー (Margarete Streicher) 等の教授法、さらに1930年代の心理学や50年代の教育学を振り返り、それらを検討している⁶⁹⁾。さらに、実践を通して体育のカリキュラム研究を行っている。そ

して、彼女は何を教え、学ぶかについて次の4つの領域で説明している⁷⁰⁾。

- (1) 練習すること
 - a) 身体と姿勢の形成
 - b) 動きの形成
 - c) 季節に限定された練習課題
- (2) 遊ぶこと
 - a) 簡単な遊び、予備的な遊び
 - b) 競技的な遊び、隊列を組む、演技発表
 - c) 本格的な遊び (チーム遊戯)
- (3) 達成すること
 - a) 走る、投げる、跳ぶ (陸上競技)
 - b) 器械運動
 - c) 季節に限定された技能課題
- (4) 踊ること
 - a) リズム教育、表現
 - b) 体操的動きのコンポジション
 - c) 社交的なダンス

そのなかで、彼女は、体操の守備範囲を「(1) 練習すること」の「a) 身体と姿勢の形成」と「b) 動きの形成」、さらに「(4) 踊ること」の「a) リズム教育」と「b) 体操的動きのコンポジション」に当てている⁷¹⁾。すなわち、体操を「練習すること」と「踊ること」の2つの領域にわたるものとして捉えている。

因みに、これについては80年代に入ってからではあるが、ザイボルトは『基礎学校でのスポーツ授業』のなかで、この領域を「体操とダンス」という言い方で、ひとつの領域として設定している⁷²⁾。また、彼女は、この著作の最初でも歴史を振り返って教授法を検討しているのであるが、そこにはシュトライヒャーの5つの論文(『自然体育』⁷³⁾からの抜粋)が載せられている。シュトライヒャーは、R. ボーデやH. メダウと同様に、体操改革運動を推進、継承、発展させてきた人物である。木村真知子は、R. ボーデとシュトライヒャーの体操について、次のように述べている。「ボーデの運動認識はシュトライヒャーにおける

自然運動の概念形成に大きな影響を与えた。… (中略) …しかしながら、たとえボーデが論理中心から生命中心の運動認識へと転換を図ったとしても、彼が依然として精神と生命の二元論に立脚している点では、前時代のシュピース体操の運動認識と何ら変わりがない。… (中略) …確かにシュトライヒャーも体育改革初期にあつては、ボーデ的な自然運動の認識に強く支配されていたようであるが、のちに機能(活動)の概念を運動学に導入することによって、抽象的時空間でのみ運動を考察するのではなく、具体的状況における運動現象にアプローチしていったことは、ボーデの運動認識の狭量さを克服するものとして注目に値する。』⁷⁴⁾ これらのことから、ザイボルトは、体操改革運動の成果を比較的多くシュトライヒャーを経由して受け継いだものと考えられる。いずれにせよ、ザイボルトは、体操改革運動の動きの教育に関する成果をスポーツ教育学の立場で取捨選択し、多くを引き継いだものと考えられる。

また、既に述べたように、ザイボルトは9年という長い間、ひとつのクラスの子どもたちに(基礎学校の1年生のときから)継続的に授業をし、実践的事例研究も行った⁷⁵⁾。彼女は、このようにスポーツ教育学・教授法の研究と長年の実践を通して、自身の学校体操をまとめたといえよう。

おわりに

ザイボルトは、体操改革運動に由来する諸々の主義主張から離れて、スポーツ教育学を土台にして、体操の動き自体を問題にすることによって、動きの教育としての学校体操をまとめた。それは、子どもの典型的な動きの形態である「走る、跳ねる、跳ぶ」を教授・練習財として、「動きの形成」と「動きのゲシュタルトウング」を目指すものであった。

彼女は、体操の動きに内在する原則を「上拍、強調、終わりをつくり出すこと」と捉えており、この動きの3局面の原則に従って「リズムカルな動きづくりとしての動きの形成」と「創造的な学

びとしての動きのゲシュタルトウング」が行われるとした。そのために、彼女は、「基本の動き、ヴァリエーション、コンビネーション、即興、コンポジション」を課題として授業を行った。授業の際には、「動きの経験の探索的収集」－「大まかな動きの形態の習得」－「洗練された良い動きの形態（体操の動きの技術）の習熟」という学習過程をたどることに留意した。また、ザイボルトは、それまで良い動きの基準とされてきた抽象的なもの、「美しい」、「有機的な」、「生き生きした」等々を用いず、その基準を動きについての具体的な言葉で説明した。

以上のように、ザイボルトの学校体操は、1970年代に行われた体操の変革のなかでも、学校教育のなかに採用可能なようにという意図のもとに明確な理論と方法論をもった特に際立ったものであったといえる。

注および引用・参考文献

- 1) 菅井京子、体操改革運動（Die Gymnastikbewegung）について、大阪成蹊女子短期大学研究紀要 第35号、43-56頁、1998年。
- 2) Bernett, H. (Hrsg.), Terminologie der Leibeserziehung 4. neu bearbeitete Aufl., Verlag Karl Hofmann, 1968, S.23やBernett, H., Die Ideologie der Deutschen Gymnastik, Sportwissenschaft 8 (1), S.22-23, 1978によると、「動きの教育（Bewegungserziehung）」という用語は、1949年にF.ヒルカー（Franz Hilker）によって導入されたといわれている。因みに、Hilker, F., Deutsche Gymnastik, Bibliographisches Institut, 1935, S.12-13で、ヒルカーはまだ「動きの修練（Bewegungsschulung）」や「動きづくり（Bewegungsbildung）」という用語を使っていた。
- 3) 菅井京子、『ドイツ体操』に果たしたルードルフ・ボーデの貢献について、スポーツ史研究第26号、1-16頁、2013年。
- 4) 菅井京子、体操改革運動の後継および発展としてのメダウの体操体系について、びわこ成蹊スポーツ大学紀要 第3号、97-104頁、2005年。
- 5) 菅井京子、1960年代の体操における動きのゲシュタルトウングの意味と方法について、スポーツ史研究 第32号、1-13頁、2019年。
- 6) 菅井京子、1970年代のメダウの学校における方向転換について、スポーツ史研究 第33号、48頁、2020年。
- 7) 菅井京子、1970年代以降のボーデ学校について、スポーツ史研究 第34号、42頁、2021年。
- 8) Seybold, A., Schulgymnastik I. Laufen, Hüpfen, Springen, Limpert-Verlag GmbH, 1976.

- 9) Bernett, H., Die Ideologie der Deutschen Gymnastik, a.a.O, S.23.
- 10) Freckmann, B., Wesen und Formen der Gymnastik, Ueberhorst, H. (Hrsg.), Geschichte der Leibesübungen Bd.3/2, Bartels und Wernitz, 1981, S.1020.
- 11) 菅井京子、1970年代のメダウの学校における方向転換について、前掲、43-56頁。
- 12) 菅井京子、1970年代以降のボーデ学校について、前掲、33-47頁。
- 13) Seybold, A., Schulgymnastik I, a.a.O., S.10.
- 14) Seybold, A., Schulgymnastik II. mit Ball, Seil und Reifen, Limpert-Verlag GmbH, 1975.
- 15) Seybold, A., Zur Didaktik und Methodik des Gestaltens in der Leibeserziehung, Ausschuss Deutscher Leibeserzieher (Hrsg.), Die Gestaltung. IV. Kongress für Leibeserziehung 4.-7.Oktober 1967 in Stuttgart, Verlag Karl Hofmann, 1967, S.57-76.
- 16) Seybold, A., Bewegungskriterien der Gymnastik (1976), Seybold, A. (bearb.), Sportunterricht in der Grundschule, Verlag Julius Klinkhardt, 1981, S.73-78.
- 17) Seybold, A., Didaktische Prinzipien der Leibeserziehung, Verlag Karl Hofmann, 1972.
- 18) Seybold, A., Pädagogische Prinzipien in der Leibeserziehung 7. unveränderte Aufl., Verlag Karl Hofmann, 1973.
- 19) Seybold, A., Didaktische Prinzipien der Leibeserziehung, a.a.O., S.126.
- 20) Eine Sportpädagogin des 20.Jahrhunderts - heute noch zeitgemäß, <http://www.sportwissenschaft.de/index.php?id=nachruf-seybold,2016/08/23>閲覧
- 21) 菅井京子、1970年代のメダウの学校における方向転換について、前掲、47-48頁。
- 22) 菅井京子、1970年代以降のボーデ学校について、前掲、36-38頁。
- 23) Internationale Arbeitstagung für Terminologie der Leibesübungen «des Sports» vom 14. bis 19. Oktober 1963.
- 24) Tscherne, F. (Hrsg.), Zur Terminologie der Leibesübungen, Österreichischer Bundesverlag, 1964, Vorwort.
- 25) ebd., S.68.
- 26) ebd., S.72.
- 27) 菅井京子、1970年代のメダウの学校における方向転換について、前掲、48頁に、体操の多様化についてW. ボーデやグーチェとマルクマンの文献を参考にして具体的な体操の様々な名称が挙げられている。W. ボーデについてはこの論文の注102) で、グーチェとマルクマンについては注103) で詳しい説明がなされている。
- 28) Seybold, A., Schulgymnastik I, a.a.O., S.8.
- 29) ebd., S.7.
- 30) 山崎正一、哲学的人間学、山崎正一・市川浩編、現代哲学事典、講談社、1979年、451頁で、哲学的人間学 (philosophische Anthropologie) は次のように説明されている。「人間学は、人間とは何かを問題にするものであるが、人間を生物学的、生理学的に考察する『自然人類学』と、人間を文化生活を営む存在として考察する『文化人類学』とがある。両者は、ともに経験的事実に基づいた実証科学として人間存在を対象として考察する立場のものであるが、これに対して『哲学的人間学』は人間存在を通路とする人間学であって、ここでは人間存在は対象でなく、むしろ主体である。… (以下略)」
また、奥谷浩一、哲学的人間学の系譜、梓出版社、2004年、3-12頁では、おおよそ次のように述べられている。哲学的人間学は、M. シェーラー (Max Scheler, 1874-1928) を提唱者とし、人間の問題を哲学研究の中心的課題として位置づけて、人間に関わる個別諸科

学の研究成果との接点を維持しながらも人間の本質問題を独自に哲学的に探求しようとしたひとつの哲学上のグループであり、シェーラーの後にプレスナー (Helmuth Plessner, 1892-1985) やゲーレン (Arnold Gehlen, 1904-1976) などの後継者たちによって継承・発展させられていった哲学思想の潮流または学派を指し示す用語である。現代の人間科学に今なおきわめて多くの示唆を与えるものであるし、現代哲学のうちに部分的に継承されているが、哲学のひとつの潮流としては消滅している。

- 31) Bernett, H., Grundformen der Leibeserziehung, Verlag Karl Hofmann, 1965, S.80-82で、ベルネットも、音楽体操をヒルカーやR.ボーデを引用して説明している。
また、ベルネットは、体操がこのように変化する切っ掛けとなったことについて、Bernett, H., Die Ideologie der Deutschen Gymnastik, a.a.O., S.22-23で、1949年のフルダでの芸術教育会議 (Kunstpädagogischer Kongress in Fulda 1949) を挙げている。そこで、ヒルカーが「動きの教育 (Bewegungserziehung)」という概念を掲げ、体操の教育的意義とその後の体操の指針を示したという。
- 32) Seybold, A., Schulgymnastik I, a.a.O., S.8-10.
- 33) F.ニーチェ (著)、吉沢伝三郎 (訳)、ツァラトゥストラ (上)、筑摩書房、61頁、1993年に、「身体はひとつの大いなる理性である」という記述がある。
また、川上博子、ニーチェの大いなる肉体についての考察---「大いなる理性」を中心に、リュンコイス 38号、45-60頁、2005年でも参照することができる。
- 34) L.クラークス (著)、千谷七郎、平澤伸一、吉増克實 (訳)、心情の敵対者としての精神第一巻、第二巻、うぶすな書院、2008年。
- 35) Seybold, A., Schulgymnastik I, a.a.O., S.10.
- 36) ebd.
- 37) Seybold, A., Zur Didaktik und Methodik des Gestaltens in der Leibeserziehung, a.a.O., S.57.
- 38) ebd.
- 39) ebd., S.58.
- 40) ebd., S.57.
- 41) 例えば、体操の基本の動きとして選定された動きの型やバレエの様式化された基本技術等。
- 42) Seybold, A., Schulgymnastik I, a.a.O., S.16.
- 43) Bode, R., Rhythmische Gymnastik zweite, erweiterte Auflage, Wilhelm Limpert Verlag, 1957, S.23. そこで挙げられている下拍 (Abtakt) は、ebd., S.32で、「例えば動きが終わること (das Ausklingen)」と補足説明されている。
- 44) Medau, H., Medau, S. und Holler - von der Trenck, J., Moderne Gymnastik. Lehrweise Medau, Pohl-Druckerei und Verlagsanstalt, 1967, S.137.
- 45) Bode, R., a.a.O., S.15では、Bewegungserziehungという用語が、Medau, H., Medau, S. und Holler - von der Trenck, J., a.a.O., S.33では、BewegungsbildungとBewegungserziehungという用語が使われている。
- 46) 「跳ねる」については、「はじけてとび散る」という意味合いからHüpfenの訳語として用いた。跳ぶ (Springen) を膝・腰の力によって行われる大きな跳躍とし、跳ねる (Hüpfen) を主に足首の力によって行われる小刻みな跳躍とした。
- 47) Seybold, A., Schulgymnastik I, a.a.O., S.11 und 15で、ザイボルトは、「学校体操には『姿勢の形成 (Formung der Haltung)』と『動きの形成 (Formung der Bewegung)』

という 2 つの特に重要な使命がある」

(S.11) と述べ、姿勢については、「ポーズのような特別な開始姿勢から動きは決して始まらない」(S.15) と述べている。このことから、彼女の意図する姿勢の形成とは、静的な姿勢ではなく、動きのなかに現れる動的な姿勢を問題にしていると思われる。彼女の学校体操は、姿勢を含めた「動きの形成」を考えているようである。

- 48) ebd., S.11で、ザイボルトは、基幹学校になると、「走る、跳ねる、跳ぶ」のほかに、「歩く、はずむ、振る」を加えるという。ただし、「はずむ動きはそれ自体が練習対象としては、ほとんど現れない。はずむの体操の形態はひとつの技術形態 (Kunstform) であるからである。しかし、はずむは不可欠な構成要素として、ほとんどあらゆる動きのなかに現れる。はずみながら走る、跳ぶときにははずみながら体重を受け止める、はずみながら縄跳びをする、ボールをはずみながら受ける等々」とも述べている。
- 49) ebd., S.10.
- 50) Seybold, A., Schulgymnastik I, a.a.O., S.12-13.
- 51) いわゆる、体操走り、着地の衝撃を吸収するつま先走りのこと。Seybold, A., Zur Didaktik der Gymnastik in der Grund- und Hauptschule, Verlag Karl Hofmann, 1990, S.55では、少しかだけ詳しく、つま先から着地してかかとへ体重を移す理由が次のように付け加えられている。「体操場の床は芝生より硬いからである。」
- 52) Seybold, A., Schulgymnastik I, a.a.O., S.10.
- 53) Holler - von der Trenck, J., Sinn, Bedeutung und Entwicklung des Gestaltens in der Modernen Gymnastik, Leibesübungen 18(7), S.3, 1967にも、次のような記述がある。「体操においては、有機的な動きにこそ関心があるのであるから、

あらゆる動きのゲシュタルトウングの基本形は、3分節である。」ここでJ.ホラーがいう3分節とは「上拍、強調、終わり」のことである。

- 54) Der Reichsverband deutscher Turn-, Sport- und Gymnastiklehrer e.V., Deutsche Gymnastik, Wilhelm Limpert=Verlag, 1935, S.9-21.
- 55) Seybold, A., Zur Didaktik und Methodik des Gestaltens in der Leibeserziehung, a.a.O., S.72に、Holler - von der Trenck, J., Sinn, Bedeutung und Entwicklung des Gestaltens in der Modernen Gymnastik, a.a.O., S.3-6からの引用がある。
- 56) Seybold, A., Schulgymnastik I, a.a.O., S.13に、Münstermann, U., Versuch einer Methodik zur Rhythmischen Gymnastik, Leibeserziehung 16(2), S.46-48, 1967からの引用がある。
- 57) Seybold, A., Schulgymnastik I, a.a.O., S.16.
- 58) ebd., S.14.
- 59) ebd., S.14-16.
- 60) Seybold, A., Bewegungskriterien der Gymnastik (1976), a.a.O., S.75-78.
- 61) Bode, W. (Hrsg.), Rudolf Bode. Leben und Werk, Festschrift des Bode-Bundes e.V., 1972, S.12-19.
- 62) Rothenberg, G., Hinrich Medau zum 75. Geburtstag, Leibesübungen 5, S.6-7, 1965.
- 63) Seybold, A., Schulgymnastik I, a.a.O., S.15.
- 64) ebd., S.16.
- 65) ドイツスポーツ科学協会 (Deutsche Vereinigung für Sportwissenschaft) のホームページに掲載されたC.ケーゲルマンによる追悼文、前掲。
- 66) 岸野雄三、スポーツ科学とは何か、岸野雄三・水野忠文・朝比奈一男編著、スポーツの科学的原理、大修館書店、1977年、96頁。

岸野は次のように述べている。「いまやスポーツという表現は国際的にも最も一般的な運動概念として用いられ、スポーツ科学という概念も、ようやく定着しはじめたのである。したがって1970年前後から、ドイツではSportpädagogikという名称が使用されはじめた。」

- 67) Röthig, P. (Red.), Sportwissenschaftliches Lexikon 4. Unveränderte Aufl., Verlag Karl Hofmann, 1977, S.285-286.
P.レーティッヒ（編集）、岸野雄三（日本語版監修）、スポーツ科学事典、プレス ギムナスチカ、1981年、202頁。
- 68) Seybold, A., Pädagogische Prinzipien in der Leibeserziehung 7. unveränderte Aufl., a.a.O., S.13-175.
- 69) Seybold, A., Didaktische Prinzipien der Leibeserziehung, a.a.O., S.18-22.
- 70) ebd., S.23-125.
- 71) ebd., S.16-17.
- 72) Seybold, A. (bearb.), Sportunterricht in der Grundschule, a.a.O., S.66-87.
- 73) Streicher, M., Natürliches Turnen 1 und 2 Teile, Verlag Jugend und Volk, 1971.
- 74) 木村真知子、自然体育の成立と展開：運動学的観点から、不昧堂出版、1989年、123-124頁。
- 75) Seybold, A., Schulgymnastik I, a.a.O., S.17.

（2021年4月8日受付）
（2022年2月11日受理）